



Title	源氏物語のコトバと機構
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41991
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	加藤 昌嘉
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 15097 号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学位論文名	源氏物語のコトバと機構
論文審査委員	(主査) 教授 伊井 春樹 (副査) 教授 後藤 昭雄 教授 柏木 隆雄

論文内容の要旨

源氏物語の研究は、1945年以降、それまでの皇国史觀の枷から解き放たれるとともに、新しい資料の発掘もあって、成立についてかまびすしく論じられ、その後に続いたのは、主題論、構造論、王權論、身体論、性差論、文化論といった視点からの文学論であり、今日もたえずそのような新しい方法による作品分析が持続される。申請者は、源氏物語を論じるためのよりどころとしての概念をすべて排除し、現存するテキストのコトバの分析を通じて、その連鎖による巻と巻との関連、表現された人物たちの身振りや姿態に共鳴する他の巻における場面など、徹底して細部まで読み取り、そこに新しい意義づけをしていこうとする。

本論文の構成を示すと、第Ⅰ編「源氏物語のコトバと身振り」では、「宇治十帖のコトバの線」「源氏物語の身振りの力-笛を吹くこと-」「源氏物語の身振りの力-花の枯れ枝をさしだすこと-」の三章、第Ⅱ編「源氏物語の権力場と機構」では「夕霧巻の機構-致仕大臣一族と夕霧-」「宿木巻の機構-明石一族と浮舟-」「蜻蛉巻の機構-六条院と明石一族-」の三章、第Ⅲ編「源氏物語の内部と外部」では「源氏物語の中の手習巻という寄生体」「源氏物語から中世王朝物語へ-しのびね物語のコトバの網-」「源氏物語の本文と物語世界」の三章からなり、いずれも基本的には巻々にちらばるコトバとコトバの相関関係から、新たに浮かびあがる作品の構造的な世界を読みとっていこうとする。

宇治十帖において、匂宮は一貫して「きよら」として賛美され、薰は一貫して第二級の「きよげ」のコトバが与えられるものの、大君・中君はどちらのコトバも与えられない。ところが、浮舟は入水を境にして「きよら」「きよげ」が賦与されてくるのは、「潜在的薰」像の造型であり、そのような属性が撫でつけられて入水し、新たな主人公として再生したとする。身振りの力論として、男が〈笛を吹くこと〉は、恋しい〈女君を獲得すること〉に連動する関係を指摘するとともに、横笛巻で幼い薰が笛を口にする仕種は、柏木巻での柏木が夕霧の夢に現れ、形見の笛の行方を案ずることに連動し、いわばその疑似的な代理行為であったと解する。以下、コトバの分析を通じて、源氏物語に沈潜する第二部から第三部の巻々の連繋関係をたぐりよせ、従来の読みには拘泥しない新しい物語論を開拓していく。

論文審査の結果の要旨

源氏物語はそれぞれの時代の関心により、多様な方法ないしは文学論によって読まれ、登場する人物やその作品世界が解き明かされてきた。構造主義が起こればその理論によって分析され、記号論や身体論、ジェンダー論が西洋文学の研究で盛んになると、同じく源氏物語もその視点から説かれるといったありさまで、今後も果てしなくこの状況は持続されていくであろう。そのような最新の理論をいち早く適用して作品を解釈することが、現代における研究の旗手としてあげつらわれかねない現状に、申請者は基本的には背馳する立場にある。ア・プリオリに存在する観念から作品を分析するのではなく、現存するテキストを一つの構造体と見、そこに散在するコトバや身振りの身体行動が、どのような巻や場面と連繋して機能しているのか、またあるコトバから新しいコトバが紡がれて増殖し、物語の世界を創造していくのかを、徹底的に究明していくとする態度を示す。

このような方法によって、従来は見えなかった物語世界が、無関係と思われたコトバとコトバの結びつきによって浮かび上がり、作品において重要な役割を果たしていたことが知られてくる。第Ⅱ部において、夕霧が柏木の残した落葉宮と結びつき、一条宮を領有することの意味、それはたんに好き心の発露ではなく、彼の勢力圏の伸張が意図されていたのだとする。また、手習巻のコトバを詳細に見ることによって、この巻はそれまでの巻の表現の反復であり、叙述の力を失った、表現の縮小再生産がなされているにすぎなく、物語は直前の蜻蛉巻で終息していたと主張する。

申請者は現代の記号論や身体論等とは無関係な立場から論じていくものの、やはりそういった潮流にあることは否めなく、またコトバによる巻と巻との連接関係の分析は、きわめて有効な点もありはするが、一面解釈の危うさも感じないわけにはいかない。ただ、新しい解釈や作品分析によって斬新な成果をもたらしたと判断し、本研究科委員会は博士（文学）の学位に充分ふさわしい価値を有するものと認定する。